

船団

●第97号

特集「伝統の力」



会員作品



坪内 稔典

老人は悴む象は足を踏む
象連れて明日来やがれ、おっ雪だ
正月にペンギン歩きしてはだめ
一月も中旬だからトドが来る
立春の駅のそばから来たな、君
水脱いで春の真昼の河馬二トン
雲は春オランウータンぶら下がり

中井 保江

小春日を伸ばして巻けば卵焼き
鯨麩は本日売り切れ寒波来る
顔見世や役者出揃う京野菜
おばちゃんは七味効かせてしゃべる人
葉牡丹の渦より新しいわたし
一月のスタートダッシュ向い風
雨だれや老人も冬芽も柔らかかに

中居 由美

銀紙の裏に残っている寒さ
親と子と子と子と子の親春隣
まずヤフーニュースそれから木の芽風
菜の花の生まれ持ちたる午後の色
旧道の春や右手に缶コーヒー
春の土えいと持ち上げ運びおり
蜂の巣に最敬礼をして通る

中谷 仁美

春の雪ああそうですかと言えたなら
寝返りをうつたび春がちよとずつ
近畿一円今日はぶらんこ揺れている
自転車に乗れますように山笑う
「もしもし」のあとの沈黙春うらら
花冷えにダイオウイカはどこへ行く
桜餅 停戦 協定 結ぶ 日の

中谷三千子

小春日の一人もいいな万歩計
つぎつぎとランナー背高泡立草
初時雨百年前の東京駅
公園で筋トレ三日目の雪だるま
日向ぼこ針箱の蓋開いたまま
コート着て尻尾振りにくそうにして
鰯酒や濡れてひつつく箸袋

長沼 佐智

ぼたん雪クレーのEは迷路かも
一斉にスマホすいすい冬鷗
骨せんべい振掛けおにぎり骨正月
骨正月通過するする誕生日
いつの日か変身を待つ納豆汁
闇鍋の闇をつかんでいいですか
交信をこれからしたいびわの花

中原 幸子

石路咲いて明日の鍋をぴかぴかに
愚痴言うて豆腐をもらう鴨の鍋
立春大吉イクメンは鎌研いでいる
指 O K 目玉 O K 水温む
頬杖のビフォーアフター春の雪
だいじょうぶ明日はまつさら菜の花忌
ヤエムグラ芽吹く石ところ拾う

原 ゆき

むかしむかしあるところにと葛湯とく
葱切つて葱の話を終わらせる
先生の一日一句みかん山
眠たさよのうさぎあまみくろうさぎ
パソコンの壊れて雲はお正月
飴の芯高温アネモネのブルーケ
草餅や草のかおりの喉仏

早瀬 淳一

春隣音楽室のモップ棒
スリッパはいつも一対去年今年
ちゃんちゃんこキネマ旬報五年分
口癖は「だって」だったな芹なずな
人込みの中に生れる紋白蝶
捨てられたテレビに映る春の雪
早春のビル数本を蹴っ飛ばす

東 英幸

咲き誇る皇帝ダリアごみを出す
図太さは家主に負けぬ冬の蠅
海までを水仙匂う長い坂
寒禽の太古は陸を歩きおり
漱石に「こころ」のありて仏の座
狐火の人恋しくて一つ喘く
じゃこ天の中の冬海平らげる

火箱 ひろ

ホットレモン人恋しくて人嫌い
現住所 梅尾町 八雪 婆
焚火してだんだん虫歴二年あり
黒セーターただものでないお爺さん
ミーティング冬の日向を確保せよ
初鴉このごろ 鰻頭生活と
のつしのつしと宗達の象日脚伸ぶ

陽山 道子

小夜時雨赤いスクラップ帳たたむ
雪が舞うカナダへ手紙書く手筈
初春の手帳に印す 赤い丸
立春の窓辺に青い砂時計
山に雪醬油おかきの三枚目
初音聞く足音止めて息止めて
春の雲ワンデイパスとティーボトル

隣組

平井奇散人

夏豆や昔語りの隣組
六月の心恥かし 体育館
空梅雨やのぼせ腰痛女坂
夏柳元序二段のチャンコ店
目を閉じて海月の海を浮遊する
梅雨の星ピーターパンになるあなた
笑う人暗算が好きレタスもね

平川 陽三

鬼ごっこ小春日和に谷隠れ
頑張ると頑固と言われ冬の薔薇
日脚伸ぶ猫をみならい身づくろい
凍て戻る夜更けの路地の靴の音
冴かえる夫婦の愛のありどころ
だし惜しむ余寒の掌には五円玉
最晩年身を焼く火事も思し召し